

演題:「全身倦怠感を主訴に来院した男性の一例」

与論徳洲会病院 初期研修医
湘南鎌倉総合病院二年次 新津 敬之

抄録；

症例：51 歳男性

既往歴：アルコール依存症

現病歴：入院 3 日前からの全身倦怠感、眼前暗黒感あり、一度改善傾向あるものの症状は持続、入院当日家族の勧めあり受診、採血にて白血球が 1320 と異常低値、胸部 CT にて右下葉浸潤影を認め、市中肺炎治療目的に入院となった。

入院後経過：入院後体温は上昇し、低酸素血症は進行、第 1 病日夜間、酸素化不良で緊急挿管管理となる。その後血圧低下、尿量低下は持続し NAD、ステロイド投与するも反応乏しく、酸素化不良も進行し、第 3 病日に死亡となる。

考察：本症例から貴重な市中肺炎の一例を経験した。敗血症診療には EGDT とプロトコルが有名であるが、実際、循環血液量量の把握等含めた管理は難しく、また早期抗菌薬投与が求められることから、治療の遅れが致死率上昇につながる事も有名である。敗血症管理に関して、文献学的考察をふまえて考察する。